

国 語

(200 点)
(80 分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、41 ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。

なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。

- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 受験番号欄

受験番号(数字及び英字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄、試験場コード欄

氏名・フリガナ及び試験場コード(数字)を記入しなさい。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(解答番号)

1

}

36

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

日本の庭は時間とともに変化し、推移することが生命なのだ。ある形を凍結させ、永久に動かないようにとの(イ)キネンを籠めた、(イ)キネンヒ的 な造型が、そこにあるわけではない。不変の形を作り出すことが芸術の本質なら、変化を生命とする日本の庭は、およそ芸術と言えるかどうか。これは少なくとも、ヨーロッパ式の芸術理念とは違った考えに基づいて、作り出され存在しているもののように思われる。

私たち日本人の多くは、少なくとも戦後の住宅難からアパート暮らし、団地暮らし、マンション暮らしが一般化するまでは、規模の大小にかかわらず、日本式の庭または庭らしい空間を伴った家に住んでいた。庭らしい空間というのは、庭を持たない家でも、物干し場や張り出しの手摺りや軒下などの僅かな空間を利用しては、鉢植や盆栽を並べたり、蜜柑箱や石油缶などに土を入れてフラワー・ボックスに仕立てたり、庭の代用物を作ることに執心するいじましい心根を持っているからである。

そういう心根の大本をたずねると、日本人が古来、人間の生活と自然とを連続したものと受け取り、自然を対象化して考える傾向のなかつたことに気づく。それは(ウ)セイフクすべき対象ではなく、その中に在って親和関係を保つべきものであつた。あるいは草木鳥獣虫魚から地水火風に到るあらゆるものと、深い「縁」を結ぶことによつて生きるという考え方である。それらの生物も無機物も、あるいは自然界のあらゆるものを、魂と命を持ったものとして心を通わせ、畏れ親しんだアニミズムの思想、あるいは心情があつた。

ヨーロッパ式の庭園は、左右相称で、幾何学的図形をなしている花壇や、やはり幾何学的図形を石組で作り返し、中央に噴水を出した泉水や、丸く刈り込んだ樹木や大理石その他の彫刻を置いた、よく手入れされた芝生など、人間の造型意志をはつきり示しているところに特色がある。それは最初に設計した人の手を離れた時、一つの完成に達しているのであつて、その後手入れさえ施していればそのまま最初の形を保持して行くことが出来ると考えた。

庭園において動かない造型を作り出すということは、彫刻や絵画や建築や、ヨーロッパ流の芸術理念を作り出しているそれら

のジャンルに準じて、庭園も考えられているということである。

ところが、日本では作庭をも含めて、ことに中世期にその理念を確立したもろもろの芸術——たとえば茶や生花や連歌・俳諧など——においては、永遠不変の造型を願わないばかりか、一瞬の生命の示現を果たしたあとは、むしろ消え去ることを志向している。不変とは、ピンで刺した揚羽蝶あひはちようの標本のように、そのまま死を意味する。それに反して変化こそ、生なのである。西洋の多くの芸術が志向するものが永遠に変わることのない、美しい堅固な形であるなら、日本のある種の芸術が志向するものは移つて止まぬ生命の輝きなのである。生命が日本の芸術、この場合は日本の庭の、根本に存在する標しるしなのだ。

私はそれら日本の芸術家たちに、自分の作品を永遠に残そうという願いが、本当にあつたかどうかを疑う。ヨーロッパ流の芸術観では、芸術とは自然を素材にして、それに人工を加えることで完成に達せしめられた永遠的存在なのだから、**A** 造型し構成し変容せしめようという意志がきわめて強い。それが芸術家の自負するに足る創造であつて、それによつて象徴的に、彼等自身が生へへの望みを達するのである。

造型意志が極端に弱いのが、日本の芸術である。日本における美の使徒たちに、そのような意志が微弱にしか育たなかつたのは、やはり日本人が堅固な石の家にでなく、壊れやすく、**E** クちやすく燃えやすい木の家に住んでいることに由来しているかも知れない。彼等は自分たちの生のあかしとしての造型物を、後世に残そうなどは心がけなかつた。

たとえば、生花とは造型なのか。たとえそこにいくらかの造型的要素があつたとしても、それが生花の生命であり、目標であるのか。馬鹿らしい。彫刻や絵画が永遠の造型を目ざしているのに、花というはかない素材で何を造型しようというのか。ひときの美しさを誇つてたちまち花は散るのである。散るからこそ花は美しく、そこに生きた花の短い命との一期いちごの出会いを愛惜することが出来る。**B** 造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である。

あるいはまた、主あなと客きやくとが一室いつしつに対座して、一服の茶を喫することに、形を残そうとの願いがいささかでも認められようか。茶室や茶庭や茶碗ちawanや茶匙ちさしや茶掛ちかけなどに、ある造型が認められるとしても、それが茶の湯の目的なのではない。一服の茶をオ バイカイとして、そこに美しく凝縮し純化した時間と空間とが作り出されたら、それは客に取つても主に取つても、何物に

も替えがたい最高度の悦楽で、それこそ生涯の目標とするに足る、輝かしい生命の発露、一期一会の出会いであった。

造型意志を極小にまで持つて行つた文学は、十七字の発句(注2)であろう。だが、芭蕉は発句よりも連句に、自分の生きがいを感じ

た。連句はそれこそ自分一個のはからいを極微に止めて、あとはなりゆく自然のままに自分を委ねてしまつた文学なのだ。座の

雰囲気(注3)の純一化が連句を付け合う者たちの楽しみであつて、文台引き卸せば即ち反古(注3)とは、芭蕉の日ごろの覚悟であつた。残さ

れた懷紙は、座の楽しみ(注3)の粕に過ぎなかつた。自己を没却し、自然のままに随順し、仲間と楽しみを一つにするところに、やは

り茶会と同じ、一期一会の歎(注3)びがあつた。

では庭は、どのような意味で、日本の芸術であつたのか。

日本の代表的な庭園とされている一つに、龍安寺方丈の石庭がある。一樹一草も使わず、大小十五の石が五十余坪(注5)の地に置

かれ、一面に白砂を敷きつめただけの庭で、庭全体が海面の体相をなし、巖が島嶼(注4)に準えられ、一見する者は誰しも精神の緊張

を覚える。この庭は外国人にもひどく感動を与えるらしく、ことにアメリカにはこの形を模した石庭がいくつも作られていると

いう。だが、それが龍安寺の石庭と似ても似つかぬものであつたとしても、致し方もない。

石庭といえは、日本の庭の代表のように言われているのは、どういふ理由によるのだろうか。C この庭の絶賛者の一人に志賀

直哉氏がある。氏は言う。「これ程に張り切つた感じの強い、広々した庭を自分は知らない。然しこれは日常見て楽しむ底の庭

ではない。楽しむには余りに厳格すぎる。しかも吾々の精神はそれを眺める事によつて不思議な歡喜踊躍(注4)を感じる」(龍安

寺の庭)。

大正十三年に書かれたこの文章が、この庭を一躍有名にし、その後賛美者の列がつづき、中には石の配置にことさらな意味づけを見出そうとする哲学好きも多かつた。私もまた、志賀氏の文章によつて、龍安寺の庭の美を知つた一人だが、論者のその意味づけのうるささに何時か嫌悪を覚えるようになり、これが果たして日本の庭を代表する傑作なのかと、いくばくの疑いを抱く

ようになった。

志賀氏はまた次のように言っている。「相阿弥が石だけの庭を残して置いて呉れた事は後世の者には幸いだった。木の多い庭ではそれがどれだけ元の儘であるか後世では分からない。例えば本法寺の光悦の庭でも中の『八ッ橋』を信じられるだけで、他は信じられない。そういう意味で龍安寺の庭程原形を失わぬ庭は他にないだろう。此庭では吾々は当時のままでそれを感ずる事が出来る」(同)。

この一文は、石庭を相阿弥の作と想定して、ほぼその最初に作られたままの姿で今日といえども存在していることを、今日の鑑賞家である自分たちにとつて幸いだとしているのである。変化してやまぬ草木が一本もないのだから、作者が最初に置いた石の配置さえ動かさなければ、それは原形を失っていないはずだし、それを相阿弥の庭としてまじり気なく受け取ることが出来ることになる。

だが志賀氏はここで、作者(相阿弥と想定して)の意図が、そのままの形で今日のわれわれに伝わることを、どうして幸いとしたのであろう。ここにはやはり、永遠不変のキネシト的な造型物を志向するヨーロッパ流の芸術理念の上に、飽くまでも作者の個の表現としての作品を重んずる近代風の考えが重なっているのではなからうか。そのような点から考えれば、龍安寺の石庭は、変化することのない堅固な素材だけで作られていて、それはヨーロッパ風の芸術理念から言っても、何等躓きとなる要素はない。だが、日本の庭の多くは、作られた瞬間に、歲月による自然の変化に委ねられ、その結果庭は日々成熟を加えて行く。言わばそれは、芭蕉の言葉にあるように、「造化にしたがひ、造化にかへる」(『笈の小文』)ことを理想としている。芸術という熟語はアートの訳語として作られたものだが、術の字はやはり手わざであり、人工であつて、造化(自然)に随うという東洋古来の理念を含んでいない。

この庭は一定の空間を切り取つてその中に石を配置し、それを方丈から見るとして対象化したところに成立している。それは見るためだけの庭であつて、その意味では額縁によつて切り取られた絵と変わりはない。だが日本の多くの庭は、主の生活に融けこんで、その中に自由に出入りする事の出来る空間であつて、見るものとして対象化された作品ではない。生命を持

ち、変化する草木を一本も植えこんでいないこの庭は、思わくありげな、抽象的図形で、たまたま客人として鑑賞する立場に立てば、誰しも一種の緊迫した気分誘いに誘われるだろう。だが、この寺に住まい、朝夕この庭と対している住持の立場に立てばどうなのか。このような、つねに人に非常の時間を持つことを強い、日常の時間に解放することのない緊張した空間に堪えるには、人は眼を眠らせるより仕方がない。それは毎日それと共にあるには、あまりに息づまるような、窮屈きわまる庭なのである。日本の多くの庭の、人の気持をつくつろがせ、解き放ち、嬉戯きぎの心を全身にみなぎらせてゆくような要素が、ここにはない。志賀氏が「これは日常見て楽しむ底の庭ではない。楽しむには余りに厳格すぎる」と言つたのは、この間の機微を言つているものだと思う。庭が人の住む建築物に付属するものであるかぎり、**D** この非日常性は例外と言ふべきである。

(山本健吉「日本の庭について」による)

(注) 1 茶掛——茶席に掛ける掛軸など。

2 連句——五・七・五の長句と、七・七の短句を一定の法則の下に交互に付け連ねる俳諧の一形式。

3 文台引き御せば即ち反古——文台は句会を中心となる台で、短冊や懐紙をのせる。反古は用済みの紙。

4 龍安寺方丈——龍安寺は京都市にある臨済宗の寺。方丈は、住持(住職)の居間。

5 坪——土地面積の単位。一坪は、約三・三平方メートル。

6 相阿弥——室町後期の画家で、造園にもすぐれていた。

7 本法寺——京都市にある日蓮宗の寺。

8 光悦——本阿弥光悦。江戸初期の美術家・工芸家。

9 八ッ橋——ここでは、本法寺にある、池に沿って八角形に敷石を並べたものを指す。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①
⑤

(ア) キネン

①

- ① 必勝をキガンする
- ② 投票をキケンする
- ③ 運動会のキバ戦
- ④ 開会式のキシユをつとめる
- ⑤ 仕事がキドウにのる

(イ) キネンヒ

②

- ① ヒガイを食い止める
- ② ヒキンな例を取り上げる
- ③ 委員長をヒメンする
- ④ ヒブンを刻む
- ⑤ 国家がヒヘイする

(ウ) セイフク

③

- ① 時間をギセイにする
- ② 日程をチヨウセイする
- ③ 敵にセンセイ攻撃を加える
- ④ イッセイに開花する
- ⑤ 海外エンセイを取り止める

(エ) クチ

④

- ① 真相をキュウメイする
- ② 試験にキュウダイする
- ③ カイキュウ差別をなくす
- ④ 問題がフンキュウする
- ⑤ フキュウの名作

(オ) バイカイ

⑤

- ① 野菜をサイバイする
- ② バイショウ責任を求める
- ③ 実験にシヨクバイを用いる
- ④ バイシン員に選ばれる
- ⑤ 興味がバイカする

問2 傍線部A「造型し構成し変容せしめよう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 変化し続ける自然を作品として凍結することにより、一瞬の生命の示現を可能にさせようとする事。
- ② 時間とともに変化する自然に手を加え、永遠不変の完結した形をそなえた作品を作り出そうとする事。
- ③ 常に変化する自然と人間の生活との親和性に注目し、両者を深い「縁」で結んだ形の作品を創造しようとする事。
- ④ 変化こそ自然の本質だとする考えを積極的に受け入れ、消え去った後も記憶に残る作品を作り上げようとする事。
- ⑤ 芸術家たちの造型意志によって、自然の素材の変化を生かしつつ、堅固な様式の作品に再構成しようとする事。

問3 傍線部B「造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である」とあるが、筆者は、この生花に続けて、茶の湯、連

句の例を挙げている。それは「一期の出会い」を踏まえた上で、日本の芸術のどのような点を強調するためか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 花の命の短さ、茶の湯の主客の対座、連句の中の発句のもつ十七字という極小の単位などにしほって、芸術における簡素さを強調するため。
- ② 生花とともに愛^めでる場、茶の湯の主客の対座、連句の座のうちの楽しい雰囲気を取り上げて、芸術における人間関係の豊かさを強調するため。
- ③ 花の短い命、茶の湯の対座、連句を楽しむ時間の短さに注目して、表現された形よりも芸術における刹那^{せいな}性を強調するため。
- ④ 花の短い命と向き合うことと、茶の湯の対座、仲間で作^り合う連句の座とを重ねて、芸術における個の表現意識の弱さを強調するため。
- ⑤ 生花、茶の湯、連句を、人と物、人と人が出会う場の価値にかかわらせて、芸術における空間性そのものを強調するため。

問4 傍線部C「この庭の絶賛者の一人に志賀直哉氏がある」とあるが、志賀が絶賛したのはなぜだと筆者は考えているか。その

説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

- ① 石と白砂だけが配置された庭の幾何学的な構図に、日本の庭には珍しいヨーロッパ的芸術理念の精巧な模倣を見出したからだと、筆者は考えている。
- ② 石と白砂だけに素材を限った簡潔で緊張した造型に、日本の芸術理念とヨーロッパの芸術理念との幸福な出会いを確認したからだと、筆者は考えている。
- ③ 石と白砂だけの一見無造作に見える景物の配置に、かえって切り取られた空間としての庭本来の魅力を強く感じたからだと、筆者は考えている。
- ④ 石と白砂だけで作り出された庭の純粋な空間の潔さに、一期一会の歎びにすべてをかける作者の覚悟を直感したからだと、筆者は考えている。
- ⑤ 石と白砂だけで実現された空間の造型性に、それを創造した作者の強固な意図がそのまま息づいていることを発見したからだと、筆者は考えている。

問5 傍線部D「この非日常性は例外と言うべきである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号 9。

- ① 日本の庭が、本来、変化を生命とし、そこに一期一会の歓びをもたらすものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、不変の様式美という芸術理念を追い求めるがゆえに、例外と位置づけられるということ。
- ② 日本の庭が、本来、歲月による自然の変化に委ねられるものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、相阿弥の庭として揺るぎない個の表現であるがゆえに、例外的に芸術の正道と位置づけられるということ。
- ③ 日本の庭が、本来、自然のたたずまいと一体化し、人をくつろがせるものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、緊張感をもって見ることを強いるがゆえに、例外と位置づけられるということ。
- ④ 日本の庭が、本来、人工でありながら自然に従うものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、ヨーロッパ風の芸術理念に即応した造型美のゆえに、例外的に芸術の正道と位置づけられるということ。
- ⑤ 日本の庭が、本来、四季の変化に人の生命のはかなさを感じさせるものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、草木主体ではなく、生命なき石や砂からなる様式美のゆえに、例外と位置づけられるということ。

問6

本文は、空白行(6ページ)によって前後に分けられているが、本文の内容や展開の説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 前半では日本の庭とヨーロッパの庭との差異を芸術理念の面から説明し、後半では一転して、感性の面から龍安寺の石庭を代表とする日本の庭とヨーロッパの庭との共通性に光を当てている。
- ② 前半ではヨーロッパの芸術理念と日本の芸術理念とを比較対照し、それを踏まえて後半では日本の芸術理念から見れば、龍安寺の石庭は日本の庭の例外として位置づけられると論じている。
- ③ 前半ではヨーロッパとは異なる日本の芸術の一般的な特徴について紹介し、その上で後半では両者の芸術理念の共通点に普遍性を認めつつ、龍安寺の石庭が日本の代表的な庭園たり得る理由を説明している。
- ④ 前半では庭以外の生花・茶道・連句などの芸術分野に広く触れているが、後半では日本の庭のみを取り上げ、特に龍安寺の石庭が日本の芸術理念を集約したものだとする論理展開になっている。
- ⑤ 前半ではヨーロッパと日本の芸術理念を比較して抽象的に論じているが、それに対して後半では日本の庭を例に挙げ、龍安寺の石庭が例外的に永遠不変性を得たことを具体的に論じている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第2問

次の文章は、堀江敏幸の小説「送り火」の一節である。父の死後、老いた母とのふたり暮らしが心細くなった絹代は、自宅の一部である二十畳敷きの板の間を独身女性に限定して貸し出すことにした。以下の文章はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

しかし、半年以上のあいだ、借り手はひとりもあらわれなかった。独身女性を対象とするには、設備がどのより、いささかひろすぎるのが問題だったかもしれない。もう貸間なんてよけいなことを考えず、やっぱり母とふたりで静かに暮らそうとあきらめかけた二月末の寒い日曜日、事前になんの連絡もなくふらりとあらわれたのが陽平さんだった。周旋屋さん——不動産屋のことを陽平さんはそう言った——で、ひろい、板敷きの部屋が、ひとつ、空いている、とうかがったのですが、と当時四十代後半にさしかかっていたはずの陽平さんはなぜかいまとまったくおなじかすれ声の(ア)老成したしゃべり方で切り出し、申し訳ありません、男の方にはお貸ししないんですと驚くふたりに、はい、それはもう、うかがったうえで、やってきたんです、と言い、まだ二十代だった絹代さんの顔を恥ずかしくなるくらいじつと見つめて、おだやかにつぶけたのである。じつはむかしからの夢である書道教室を開く決心をかためて、会社を辞めた。交通の便のいい町なかは高すぎるし、そもそもじゅうぶんひろさの部屋がない。公民館の集會室を借りようかとも考えたのだが、椅子いすとテーブル(注1)にリノリウムの床ではしつくり来ないし、それよりなにより、公共施設でお金をとる催しはできないと役所に断られて行き詰まった。たしかにここは不便そうに見えるが、バスもあるし、山の上の小学校の通学路にもなっているから、近隣の子どもたちを集めやすいと思う、もしできるならば、住むのではなく、毎日、夕方から夜にかけての何時間かだけ、お宅を教室として貸していただけないものか。陽平さんは部屋も見ずに、風呂ふろあがりのような表情でそう語って頭を下げた。

母と娘は、正直、(イ)不意をつかれて顔を見合わせた。男性に、しかも書道教室として貸すなんて考えもしなかったからだ。ともあれせっかくだからと部屋を案内し、どうぞ召しあがってくださいと陽平さんから差し出された豆大福をお茶請けに三人で話をしているうち、絹代さんは、このひとが会社を辞めたのは書道教室を開く開かないという以前に、勤め仕事にむいていな

かつたからだろうと思った。A まわりを拒んだりはいしなけれど、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気を持って
いる。年齢も、まったく読めなかつた。でも、なんだかこの人なら信用できそうだと絹代さんは直感し、まだとまどっている母
親に、小さな子が集まるんならにぎやかでいいんじゃないかな、楽しそうだから、貸してあげましょうよ、と好意的な意見を述
べた。母親は母親でまたちがう基準から陽平さんを眺めていたらしいのだが、自分よりも遅いペースで話す男の人をひさしぶり
に見たと云ってしまいいには納得してくれたのである。

貸し教室としての賃料は不動産屋で適切な額を見積もってもらい、数日後には与えられた書式での契約を無事に済ませる早わ
ぎで、それから十日ほどのちに、折り畳み式の細長い座卓が五つと薄い座布団が十数枚、そのほか、紙だの墨だの筆だの作品を
乾かすのにつかう下敷きとしての古新聞だのといった消耗品がつぎつぎに運び込まれて、^(ウ)教室の体裁をなし、新学期がはじ
まって落ち着いたころには、^は貼り紙や^{くち}口コミも手伝つて、学年もばらばらな小学生が五名集まつた。とても暮らしが成り立つよ
うな人数ではなかつたけれど、夏休みを迎えるまでには総勢十二名となり、家の空気もがらりと変わってしまった。勤めている
駅裏の大手電器店から絹代さんが自転車で帰つてくると、いちはやく学校を終えた低学年の子どもたちが課題を済ませていて、
新興の一戸建てばかりで古い田舎家を知らない彼らは、ぎしぎしきしむ階段があるだけでも楽しいらしく、わざと大きな音を
たてて降りてくる。階段は居間の一角にあるので、教室に出入りする子どもたちは、絹代さんと母親の生活をそのまま横切つて
いくことになり、なんだか親類の家に遊びに来ているような雰囲気なのだ。そしてかならず、おばちゃん、おばあちゃん、さよ
なら、と云つて帰つていく。この年でおばちゃんはないよ、と泣くふりをしたりすると子どもたちは逆に喜んで、ぜつたいにお
ねえちゃんとは呼んでくれない。そして、^B絹代さんにはなぜかそれがとても嬉^{うれ}しかった。

絹代さんは遅い子どもだつたから、母親はそのころもう還暦を過ぎていたのだが、夕方、じつと坐^{すわ}っているだけで、だんだんお
腹^{なか}がすいて、集中力がなくなつてくる小さな子どもたちのために、ずっと悩まされている膝^{ひざ}の痛みも忘れて、ふだん口にしてい
るより味を濃くして食べやすく工夫した煮付けとご飯の簡単な食事を用意したり、おやつにおはぎをつくつたりするようになつ
た。これには絹代さんと陽平さんのぶんも入つていたので、日々の延長でしかなかつたとはいえ、それでも大人数の食事を用意

することに忘れていた喜びを見出した様子で、母親の気の張りはまちがいに娘にも伝わった。絹代さんも仕事が終わってからのつきあいを抑えて、子どもたちとまじわるために帰宅を急ぐようになったからである。食事のできる書道塾はやがて親たちのあいだで評判になり、外出予定が入っている日など、もっと遅くまで子どもをあずかってもらえないかと頼んでくる人も出てきた。子どもたちは、陽平先生に赤丸をもらったあと、すずも油污れもないきれいなランプがいくつもぶらさがっている階下の居間で食事をし、そのまま食卓で宿題をやったり、隣の畳の間に置いてあるテレビを見たりする。話についていけない母親のかわりに、そういうときはどうしても絹代さんがいなければならず、本業がどちらにあるのだからかわらなくなるほどだった。

最初のうち、絹代さんは遠慮して教室の様子をのぞくことはしなかったのだが、親からの電話で子どもを呼び出したり、おやつの差し入れをしたりするときには、どうしたって見えてしまう。階段のすぐ近くに物入れがあるため、陽平さんは取り出しやすいようにとそのままの机を置いていた。だから子どもたちの顔を見るより先に、彼らのほうをむいて坐っている陽平さんの、針金でも入っているんじゃないかと疑いたくなるくらいまっすぐな背中与鶏ガラみたいにほそい首筋を拝まなければならぬのだが、手本をしたためているときも朱を入れているときも、硯で墨をすっているときも、子どもたちと言葉を交わしているときも、まだ枕を話しているだけで本編に入っていない唸家みために座布団から垂直に頭がのびていて、その姿勢がまったく変化せず、食事の際も変わらないものだから、たまに傾いているとかえって不自然な感じがするのだった。墨は餓鬼に磨らせ、筆は鬼に持たせよ。教室の壁に貼られた格言の、ここぞというときには力が発揮できるのにそれをあえて抑える自然体は——そういう意味だと教えてくれたのは、もちろん陽平さんだ——、すべての行動に当てはまる指針だと思った。

しかし、とりわけ絹代さんを惹きつけたのは、教室ぜんたいに染みいりはじめた独特の匂いだった。子どもたちはみな既製の墨汁を使っており、時間をかけて墨を磨るのは陽平先生だけだったけれど、七、八人の子どもが何枚も下書きし、よさそうなものを脇にひろげた新聞紙のうえで乾かしていると、夏場はともかく、窓を閉め切った冬場などは乾いた墨と湿った墨が微妙に混じりあい、甘やかなのになぜか命の絶えた生き物を連想させるその不気味な匂いがつよくなり、絹代さんの記憶を過去に引き戻した。まだ小さかったころ、ここにも生き物がうごめいていたのだ。絹代という名前は祖父父母がつけてくれたもので、彼ら

はこの古い家の二階で細々と養蚕を手がけ、生活の資をさずけてくれる大切な生き物を、親しみと敬意をこめて「おかいこさん」と呼んでいた。同居していた息子夫婦はともに会社勤めだったから、孫の絹代さんがあとを継ぐ可能性はほとんどなかった。あの時はまだ片手間にでも養蚕にかかわっている家がいくらもあつたし、そこで生まれた娘に絹子だの絹江だの絹代だのといった名前をつけることもないではなかつたが、絹代さん自身は、二階の平台にならべられた浅い函はたの底をわさわさとうごめいていて白っぽい芋虫の親玉と自分の名前がむすびつけられるのを、あまり好ましく思っていないかつた。

触つてごらん、と言われるままに触れたその虫の皮はずいぶんやわらかく、しかも丈夫そうだった。使いこんだ白い鹿革しかがわの手袋の、ところどころ穴があいたふうの表面の匂いとかさつく音をこの書道教室に足を踏み入れた瞬間ふいに思い出し、匂いといつしよに、あのグロテスクな肌と糸の美しさの、驚くべきへだたりにも想おもいを馳はせた。あたしは肌がつるつるさらさらして絹みたいだから絹江になつたの、絹代ちゃんとかみたいに蚕を飼つてるからつけられた名前じゃないよ、と一文字だけ名前を共有していたもだちが突つかかるように言つた台詞せりふが、絹代さんの頭にまだこびりついている。生家の周辺を離れれば、養蚕なんでもう、ふつうの女の子には気味の悪いものでしかない時代に入つていたのである。それなのに、墨の匂いを嗅かいだとたん、かつてのおどろおどろしい記憶がなつかしさをとまなう思い出にすりかわつたのである。陽平さんにそれを話すと、墨はね、松を燃やして出てきたすすや、油を燃やしたあとのすすを、膠にかわであわせたものでしょう、膠にかわつていうやつが、ほら、もう、生き物の骨と皮の、うわずみだから、絹代さんが感じたことは、そのとおり、ただしい、と思えますよ、と真剣な顔で言うのだった。生きた文字は、その死んだものから、エネルギーをちようだいしてる。重油とおなじ、深くて、怖い、厳しい連鎖れんさだね。

なぜだろう、絹代さんはそのときはじめて、陽平さんのこれまでの人生を、あれこれ聞いてみたいとつよく思った。ほとんど毎日顔を合わせて食事をしてこの不思議な男の人の過去と未来を知りたい気持ちがどんどんふくらんで、それを押しとどめることができなくなつていった。どこで生まれて、どこで育つて、どんな子ども時代、どんな青年時代を送つたのか。教室を閉めたあと、無理に頼んで持つてきてもらった古いアルバムを居間で開きながら飽きもせず質問を重ねていると、これまで陽平さんを知らずにいたことがとても信じられなかつた。絹代さんの横顔にときどき視線を投げながら、陽平さんは遅くまで、質問

のひとつひとつに、あまりにまじめすぎて逆にはぐらかされているのではないかと聞き手が不安になるほど丁寧な説明をくわえた。そういう陽平さんの顔を、今度は絹代さんが見つめているのだった。

絹代さんの気持ちしが固まったのは、翌年、あんなに楽しそうに子どもたちと接していた母親が心臓発作で急死して、その喪が明けたさらに翌年の正月のことだ。全員参加の書き初め大会が教室で開かれ、四文字以内で好きな言葉を清書し、それをみんなに披露しながらひとりずつ新年の抱負を述べたとき、陽平さんは最後にすつくと立ちあがって一同を見渡し、当時大変な気があつたテレビ番組にひっかけて「絹への道」と書いた紙を掲げると、シル、ク、ロード、です、これが、ぼくの、今年の、抱負、です、と例の口調でそう読みあげておおいに笑いを取つたのだが、子どもたちには洒落しゃれにしか聞こえない話で陽平さんがなにを言おうとしているのか、「初日の出」だなんてありきたりな言葉でお茶をにごした飛び入り参加の絹代さんにはすぐに理解できず、頬ほおが少しほてつた。D 有名な女優さんとおなじだねえと大人たちからいくら褒められても嬉しくなかつた名前を、陽平さんは、あたたかい、人肌に触れるために生まれてきたなめらかな布地に、一瞬で変えてくれたのである。

(注) 1 リノリウム——建築材料の一つ。

2 枕——本題に入る前の導入部分。

3 墨は餓鬼に磨らせ、筆は鬼に持たせよ——本来は、墨をするときはやわらかくすり、筆を使うときは力を込めて勢いよく書くのがよいということのこと。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

11

13

(ア) 老成した

11

- ① しわがれて渋みのある
- ② 知性的で筋道の通った
- ③ 年のわりに落ち着いた
- ④ 重々しく低音の響いた
- ⑤ 静かでゆつくりとした

(イ) 不意をつかれて

12

- ① 突然の事態に困り果てて
- ② 見込み違いで不快になって
- ③ 予想していないことに感心して
- ④ 初めてのことであわてて
- ⑤ 思いがけないことにびつくりして

(ウ) 教室の体裁をなし

13

- ① 教室の準備がようやく済んで
- ② 教室とは異なった感じになって
- ③ 教室として立派になって
- ④ 教室がいったん雑然として
- ⑤ 教室らしい様子になって

問2

傍線部A「まわりを拒んだりはしないけれど、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気を持つている」とあるが、

「網代さん」は「陽平さん」をどのような人物としてとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 穏和で誠実な感じであるが、泰然自若として周囲に惑わされない人物。
- ② 包容力があり寛大な面もあるが、無為自然で隠遁者いんとんを思わせる人物。
- ③ 爽やかさわで優しい印象を与えるが、謹厳実直で慎重に物事を判断する人物。
- ④ 柔軟性があつて温厚であるが、闊達かつたう自在で思いのままに行動する人物。
- ⑤ 慎み深く控えめであるが、直情径行で確固とした意志を持った人物。

問3

傍線部B「絹代さんにはなぜかそれがとても嬉しかったとあるが、この部分を含む子どもたちとのやりとりを通してうかがえる「絹代さん」の心情とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

15。

- ① 「おねえちゃん」と呼ばれて当然だと思っていたが、「おばちゃん」という呼び方に表れた子どもたちの気さくな態度に触れたので、仲間意識の高まりを感じて嬉しく思っている。
- ② まだ二十代なのに「おばちゃん」と呼ばれるのは不本意ではあるが、自分を頼りにする子どもたちの気持ちが伝わってくるので、保護者になったように感じて嬉しく思っている。
- ③ 子どもたちから「おばちゃん」と呼ばれると年寄り扱いされているようで嫌だったが、陽平さんに近づいたような気がしたので、書道教室と一緒に経営しているように感じて嬉しく思っている。
- ④ 父親の死後、母親とふたりきりで寂しく暮らしていたが、自分になついで遠慮なく振る舞う子どもたちとにぎやかに交流するようになったので、家族に対するような親密さを感じて嬉しく思っている。
- ⑤ 部屋を貸すまで、大人ばかりで静かに暮らしていたが、泣くふりをすると喜ぶ生意気盛りの子どもたちが出入りするようになったので、以前の活気がよみがえったように感じて嬉しく思っている。

問4

傍線部C「とりわけ絹代さんを惹きつけたのは、教室ぜんたいに染みいりはじめた独特の匂いだった」とあるが、「絹代さん」が匂いに惹きつけられたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

号は

16

- ① 家族と過ごした幼年時代の記憶が墨の匂いによって呼び起こされ、子どもたちと一緒にいる楽しい時間と重なって鮮やかによみがえってきたから。
- ② 自分の名前と結びついたグロテスクな姿態の蚕にまつわる記憶が、墨の匂いによって、家族とつながるなつかしい思い出に変化したから。
- ③ 家族の生活の資をさずけてくれる大切な生き物として、かつては蚕に親しみと敬意を感じていたことを、墨の匂いを嗅ぐことによって思い出したから。
- ④ 気味の悪いものでしかなかった養蚕にかかわる思い出が、墨の匂いを通してよみがえったが、書道を教える陽平さんへのほのかな想いへと変質したから。
- ⑤ 墨の匂いが死んだ生き物を連想させ、蚕を飼っていた忌まわしい記憶を呼び起こしたが、そのときの生活をなつかしく思い出したから。

問5

傍線部D「有名な女優さんとおなじだねえと大人たちからいくら褒められても嬉しくなかった名前を、陽平さんは、あたたかい、人肌に触れるために生まれてきたなめらかな布地に、一瞬で変えてくれたのである」とあるが、ここに至るまでの「絹代さん」の心の動きはどのようなものと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 絹代という名前が美しい有名な女優と同じだと言われても、過去の嫌な記憶に結びつくので好きになれないでいたが、陽平さんが墨の由来とともに名前の意味を教えてください、皆の前でシルクロードになぞらえた愛情告白をしてください、温かい気持ちになつている。

② 墨の匂いに関連した生き物の死と人間の営みとのつながりを教えてくれた陽平さんから、書き初めに託された愛情表現を受けたことで、好きになれなかった名前とともに自分のことも肯定的に受け止められるようになり、陽平さんと一緒に生きていこうと考えている。

③ これまで好きになれなかった養蚕の記憶に結びついて自分の名前が、陽平さんの愛情告白を秘めた書き初めによって、悠久の歴史を想起させるシルクロードとも結びつくものだと気づき、これまでの人生を肯定的に受け入れることができるようになつている。

④ かつては友達にからかわれた養蚕の記憶しかなかった自分の名前が、陽平さんのまつすぐな生き方を知ることによって、家族との温かい生活の思い出に結びつくものだと理解するようになり、慕っていた陽平さんとともに生きていく喜びでいっぱいになつている。

⑤ 陽平さんの書道に対する姿勢にひかれる一方、墨の匂いでよみがえった自分の過去に思いをはせることで、ようやく自分の名前の意味を肯定的に受け止めることができるようになったので、書き初めに託された陽平さんの愛情を受け入れようと決心している。

問6 この文章における表現の特徴について説明したものととして適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

18

 ・

19

 。

① 「鶏ガラみたいにはせい首筋」「また枕を話しているだけで本編に入っていない嘶家みたいに座布団から垂直に頭がのびていて」のように、「陽平さん」の姿が比喩表現を用いて描写されることによって、「陽平さん」を見つめる「絹代さん」の特異な感性が強調されている。

② 「甘やかなのになぜか命の絶えた生き物を連想させるその不気味な匂い」「使いこんだ白い鹿革の手袋の、ところどころ穴があいたふうの表面の匂いとかさつく音」のように、感覚に訴える表現が多用されることによって、絹代さんの実感が巧みに表現されている。

③ 「おばちゃん、おばあちゃん、きよなら、と言って帰っていく」「触ってごらん、と言われるままに」などでは、かぎ括弧を用いずに会話の内容が示されることによって、現実感が生み出され、会話を発する人物が生き生きと描き出されている。

④ 「わざと大きな音をたてて降りてくる」「隣の畳の間に置いてあるテレビを見たりする」のように、回想の形で語られる中に現在形の表現が挿入されることによって臨場感が強められ、登場人物の心理状態と行動との結びつきが明示されている。

⑤ 「はい、それはもう、うかがったうえで、やってきたんです」や「シル、ク、ロード、です、これが、ぼくの、今年、の、抱負、です」のように、読点で区切りながら陽平さんの話し方が描写されることによって、その人物像が浮かび上がるように工夫されている。

⑥ 「陽平さん」「陽平先生」「絹代さん」など、人物同士がふだん呼び合っている名称や、「ひとりもあらわれなかった」「いささかひろすぎる」など、平仮名書きが多用されることによって、大人の世界に子どもの視点が導入され、物語が重層的に語られている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第3問

次の文章は、『兵部卿物語』の一節である。兵部卿の宮の恋人は宮の前から姿を消し、「按察使の君」という名で右大臣の姫君のもとに女房として出仕した。宮はそれとは知らず、周囲の勧めに従って右大臣の姫君と結婚した。以下の文章はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

かくて過ぎゆくほど、御心のこれに移るとはなけれど、おのづから慰むかたもある^aにや、昼なども折々は渡らせ給うて、

碁打ち、偏(注2)継(注2)ぎなど、さまざまの御遊びどもあれば、按察使の君は宮の御姿をつくづくと見るに、かの夜な夜なの月影に、さだかにはあらねど見し人に違ふところなければ、「世にはかかるまで通ひたる人に似たる人もあるにや」と思ふに、見慣るるままには、物のたまふ声、けはひ、様体、みなその人なれば、あまり心ひとつに思ふも心もなくて、侍(注3)徒(注3)にしかじかと語り給へば、

「さればよ、我もいと不思議なることも侍り。かのたびたびの御供に候(注4)ひし藏人とかや言ひし人、ここに候ひて、ことさら『宮の御乳母子なり』とて、人も(ア)おろかならず思ふさまなり。昨日も内裏へ参らせ給ふとて、出でさせ給ふを見侍れば、たびたびの御文もて往にたる御隨身も、『御前駆追ふ』とて忙(注5)はしげなるさまにて候ひしは、かの中將は仮の御名にて、宮にてぞおはしましけんや」と。

いとど恥づかしく悲しくて、「さもあらば見つけられ奉りたらん時、いかがはせん。跡はかなく聞かれんところ思ひしを、かかるさまにて見え奉らん、いと恥づかしきことにも」と、今さら苦しければ、宮おはします時はかしこうすべり(注5)つつ見え奉らじとすまふを、「人もいかなることにかと見とがめんか」と、これも苦しう、「**A**とてもかくても思ひは絶えぬ身なりけり」と思ふには、例の、涙ぞまづこぼれぬる。

ある昼つかた、いとしめやか^bにて、「宮も今朝より内裏におはしましぬ」とて、人々、御前(注6)にてうちとけつつ、戯れ遊び給ふ。姫君は寄り臥し、御手習ひ、絵など書きすさみ給うて、按察使の君にもその同じ紙に書かせ給ふ。さまざまの絵など書きすさみたる中に、籬(注6)に菊など書き給うて、「これはいとわろしかし」とて、持たせ給へる筆にて墨をいと濃う塗らせ給へば、按察使の君、にほひやかにうち笑ひて、その傍らに、

B 初霜も置きあへぬものを白菊の早くもうつる色を見すらん

と、いと小さく書き付け侍るを、姫君もほほ笑み給ひつつ御覽す。

(注7)

をりふし、宮は音もなく入らせ給ふに、御硯なども取り隠すべきひまさへなく、みなすべりぬるに、姫君もまぎらはしに扇をまさぐりつつ奇りる給ふ。按察使の君は、人より異にいたう苦しくて、御几帳の後ろよりすべり出でぬるを、いかがおぼしけむ、しばし見やらせ給ひて、かの跡はかなく見なし給ふ人のこと、ふと思し出でつつ恋しければ、過ぎにしことども繰り返し思ほし出でつつ奇り臥させ給ふに、御硯の開きたる、引き寄せさせ給へば、ありし御手習ひの、硯の下より出でたるを取りて見給ふに、姫君はいと恥づかしくて顔うち赤めつつ、傍らそむき給ふさま、いとよしよししくにほひやかなり。

(注8)

宮つくづくと御覽するに、白菊の歌書きたる筆は、ただいま思ほし出でし人の、「草の庵」と書き捨てたるに紛ふべうもあらぬが、いと心もとなくて、「さまさまなる筆どもかな。誰々ならん」など、ことなしに問はせ給へど、うちそばみおはするを、小さき童女の御前に候ひしを、「この絵は誰が書きたるぞ。ありのままに言ひなば、いとおもしろく我も書きて見せなん」とすかし給へば、「この菊は御前なん書かせ給ふ。』いと悪し」とて書き消させ給へば、わびて、按察使の君、この歌を書き添へ給うつ」と語り聞こゆれば、姫君は「いと差し過ぎたり」と、恥ぢらひおはす。

(注) 1 御心のこれに移る——兵部卿の宮のお気持ちちが右大臣の姫君に傾く。

2 偏継ぎ——漢字の偏や旁を使つた遊び。

3 侍従——按察使の君の乳母の娘。

4 乳母子——乳母の子ども。

5 すべりつつ——そつとその場を退いて。

6 籬——垣根。

7 御硯——硯や筆、紙などを入れる箱。

8 「草の庵」と書き捨てたる——按察使の君が姿を消す前に兵部卿の宮に書き残した和歌の筆跡。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20
22

(ア) おろかならず思ふさまなり

20

- ① 賢明な人だと思っている様子だ
- ② 言うまでもないと思っている様子だ
- ③ いいかげんに思っている様子だ
- ④ 並一通りでなく思っている様子だ
- ⑤ 理由もなく思っている様子だ

(イ) いとよしよししくにほひやかなり

21

- ① 実に風情があり、良い香りが漂っている
- ② 実に才気にあふれ、魅力的な雰囲気である
- ③ 実上品で、輝くような美しさである
- ④ 実にもものしく、威厳に満ちた様子である
- ⑤ 実に奥ゆかしく、高貴な育ちを感じさせる

(ウ) うちそばみおはする

22

- ① ただ寝たふりをしていらつしやる
- ② ちよつと横を向いていらつしやる
- ③ 近くの人と雑談していらつしやる
- ④ 内心不愉快な思いでいらつしやる
- ⑤ 何かに気を取られていらつしやる

問2 波線部 a ～ d の「に」の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|-----------|---|--------|---|--------|
| ① | a | 接続助詞 | b | 格助詞 | c | 完了の助動詞 | d | 断定の助動詞 |
| ② | a | 接続助詞 | b | 格助詞 | c | 断定の助動詞 | d | 断定の助動詞 |
| ③ | a | 格助詞 | b | 形容動詞の活用語尾 | c | 完了の助動詞 | d | 断定の助動詞 |
| ④ | a | 断定の助動詞 | b | 形容動詞の活用語尾 | c | 断定の助動詞 | d | 格助詞 |
| ⑤ | a | 断定の助動詞 | b | 形容動詞の活用語尾 | c | 完了の助動詞 | d | 格助詞 |

問3 傍線部 A「とてもかくても思ひは絶えぬ身なりけり」とあるが、按察使の君がそのように嘆く直接の原因の説明として最も

適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

- ① 宮に自分の存在を知られないよう気を遣いながら、女房たちに不審がられないよう取り繕わなければならないこと。
- ② 宮への思いを捨てられないにもかかわらず、右大臣の姫君の信頼を裏切らないようにしなければならないこと。
- ③ 宮に自分の苦悩を知ってほしいと願いながら、二人の関係を誰にも気づかれないようにしなければならないこと。
- ④ 宮が身分を偽っていた理由をつきとめたいと思う一方で、宮には自分の存在を隠し通さなければならないこと。
- ⑤ 宮の姿を見ないよう努めながら、宮と自分の関係を知る侍従に不自然に思われないようにしなければならないこと。

問 4

傍線部B「初霜も置きあへぬものを白菊の早くもうつる色を見すらん」という和歌の説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 兵部卿の宮に夢中になっている新婚の姫君に対して、「初霜もまだ降りないのに、どうして白菊は早くも別の色に染まっているのだろうか」と、冷やかに詠んだ。
- ② 宮仕えで気苦労が絶えないことを姫君に打ち明けたくて、「初霜もまだ降りないけれども、白菊は早くもよそに移りたがっているようだ」と、暗示するように詠んだ。
- ③ 描いた白菊を姫君がすぐに塗りつぶしてしまったことに対して、「初霜もまだ降りないのに、どうして白菊は早くも色変わりしているのだろうか」と、当意即妙に詠んだ。
- ④ 白菊を黒い色に塗り替えた姫君の工夫を理解して、「初霜もまだ降りないけれども、庭の白菊は早くも枯れそうな色に染まってしまったようだ」と、臨機応変に詠んだ。
- ⑤ 色を塗り替えられた白菊から容色の衰えはじめた女性の姿を連想して、「初霜もまだ降りないのに、どうして白菊は早くも色あせたのだろうか」と、冗談半分に詠んだ。

問5 傍線部C「恥ぢらひおはす」とあるが、この時の姫君の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 宮に会うのを嫌がっている按察使の君の様子が気の毒なので、長々と引き止めてしまった自分を恥じている。
- ② 按察使の君の見事な筆跡に宮が目を奪われているのを見て、自分が描いた絵のつたなさを恥ずかしく思っている。
- ③ 白菊の絵をめぐるやりとりを童女が進んで宮に話してしまったので、自らの教育が行き届かなかったと恥じている。
- ④ 配慮を欠いた童女のおしゃべりのせいで、自分たちのたわいない遊びの子細を宮に知られて恥ずかしく思っている。
- ⑤ 白菊の絵を置き忘れた按察使の君の行動が不注意にすぎるので、自分の女房として恥ずかしいと思っている。

問6

本文の内容に合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

27

28

- ① 按察使の君は、右大臣の姫君の夫である兵部卿の宮が自分のもとに通っていた「中将」と同一人物らしいことに気づいた。しかし、以前の関係に戻るつもりはなく、できるだけ宮の目を避けようとした。
- ② 兵部卿の宮は、かつて按察使の君に対して身分を偽っていたが、侍従は、そのことを見抜いていた。そこで、按察使の君が宮と再会できるように、宮の妻である右大臣の姫君への出仕を勧めた。
- ③ 右大臣の姫君は、按察使の君が兵部卿の宮の目を避けようとしていることに気づき、二人の関係を知られたいと思つた。そこで按察使の君に和歌を書かせ、その筆跡を見せて宮の反応を確かめようとした。
- ④ 按察使の君は、兵部卿の宮が自分のもとに通っていた「中将」と同一人物であることを、侍従から知らされた。そこで、右大臣の姫君の目を避けながら宮に自分の存在を知らせるため、和歌を詠んだ。
- ⑤ 兵部卿の宮は、右大臣の姫君と結婚してからも姿を消した恋人を忘れてはいなかった。そんなとき、偶然目にした和歌の筆跡が恋人のものに似ていることに気づき、さりげなく筆跡の主を探り出そうとした。
- ⑥ 右大臣の姫君は、新たに仕立ててきた按察使の君を気に入り、身近に置くようになった。しかし、親しく接するうちに彼女が夫の兵部卿の宮と親密な間柄であったことを察し、不安な思いにかられた。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点50)

吾郷錢明經善詩賦(注1)每歲督學科歲試(注2)古詩錢必冠軍(注3)

一歲題為天柱賦(注6)錢入場時飲酒過多竟大醉入号(注7)輒酣(注8)

睡同試者疾其每試居首不肯呼之使醒有納卷者過其(注9)

旁乃告之錢始嘗然已無及矣卒爾問題書七言絕句一(注10)

首詩云

我來揚子江頭望(注11)

一片白雲數点

安得置身天柱頂(注12)

倒看日月走人間(注13)

学^(注12)使^テ得^レ卷^ヲ、評^{シテ}云^フ「此人胸中不知^ト、吞^{ムカラ}幾^ニ雲^(注13)夢^ヲ。仍^{ヨリテ}取^ル第^一」。

(姚^{ようげん}元^し之^し『竹葉亭雜記』による)

(注) 1 錢明経——人名。

2 賦——韻文の一種。長編を原則とする。

3 督学——官名。官吏を登用するための予備段階の試験において出題や採点を管轄した責任者。

4 科歳——科試と歳試。ともに官吏登用のための予備段階の試験のこと。

5 冠軍——成績最上位者。

6 天柱——神話の中に出てくる、天を支えているという柱。

7 場——試験の会場。

8 号——試験場の中にある受験者用の小さな個室。

9 納卷者——答案を回収する係の役人。

10 菅然——ぼんやりすること。

11 揚子江——長江の別名。

12 学使——督学の別名。

13 雲夢——古代、長江中流域にあつた広大な湿原の名。

問1 傍線部(1)「善」・(2)「疾」の意味を表す熟語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

29

30

(1)

29 「善」

⑤ ④ ③ ② ①

多 愛 博 特 絶
作 好 覧 技 賛

(2)

30 「疾」

⑤ ④ ③ ② ①

憎 閉 苦 迅 病
悪 口 痛 速 気

問2 二重傍線部(ア)「竟」・(イ)「乃」・(ウ)「安」の読み方の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| (ア) | (ア) | (ア) | (ア) | (ア) |
| つひに | すでに | つひに | すでに | つひに |
| (イ) | (イ) | (イ) | (イ) | (イ) |
| なほ | すなはち | なほ | なほ | すなはち |
| (ウ) | (ウ) | (ウ) | (ウ) | (ウ) |
| いづくんぞ | いづくんぞ | いづくにか | いづくにか | いづくんぞ |

問3 傍線部A「不肯呼之使醒」について、(i)返り点の付け方と書き下し文、(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各

群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

32

33

(i) 返り点の付け方と書き下し文

32

- ① 不_下肯呼_ニ之使_レ醒_上 肯_めへて之の使ひを呼ぶも醒_さめず
- ② 不_レ肯_ニ呼_レ之使_レ醒 之を呼ぶも醒めしむるを肯_がんぜず
- ③ 不_レ肯_下呼_ニ之使_レ醒_上 之の使ひを呼ぶも醒むるを肯_んぜず
- ④ 不_ニ肯呼_レ之使_レ醒 肯_へて呼ばず之きて醒めしむ
- ⑤ 不_ニ肯呼_レ之使_レ醒 肯_へて之を呼びて醒めしめず

(ii) 解釈

33

- ① 声をかけるのを遠慮してそばまで行って目覚めさせた。
- ② 声をかけて起こそうとしたが目覚めさせられなかった。
- ③ 声をかけて目覚めさせてやろうという気にならなかった。
- ④ その使いの者を呼んだが目覚めさせることに賛成しなかった。
- ⑤ 勇気を出してその使いの者に声をかけたが起きなかった。

問4 傍線部B「已無_レ及_レ矣」の前後の状況を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 銭明経は、仲間が起こしてくれなかったことにあきれたが、もう仕方がないので、ひとまず題を尋ね絶句を書いた。
- ② 銭明経は、はじめ事態が飲み込めなかったが、自分以上の実力者はいないので、落ち着いて題を尋ね絶句を書いた。
- ③ 銭明経は、試験が終了間近なことによりやく気づいたが、もう時間がないので、いそいで題を尋ね絶句を書いた。
- ④ 銭明経は、当初気が動転したが、解答题を取り戻すことはできないので、あわてて題を尋ね絶句を書いた。
- ⑤ 銭明経は、酒のために意識が朦朧もうろうとしていたが、後悔してもはじまらないので、強引に題を尋ね絶句を書いた。

問5 傍線部C「一片白雲数点 」について、(a)空欄に入る語と、(b)この句全体の解釈との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① (a) 淡——(b) 白い雲の切れ間から数本の淡い光が差し込んでいる。
- ② (a) 楼——(b) 空の片隅に浮く白い雲と幾つかの建物が見えている。
- ③ (a) 雨——(b) 白い雲が空一面に広がり雨がぼつぼつと降り始める。
- ④ (a) 山——(b) ひとひらの白い雲と幾つかの山があるばかりである。
- ⑤ (a) 鳥——(b) 空には一つの白い雲が漂い数羽の鳥が飛んでいる。

問6 傍線部D「仍取第一」とあるが、学使が錢明経を第一位にした理由として最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- ① 求めていた形式と異なる作品であることに不満はあったが、自身を天柱の頂上に置き、太陽や月を背にしながら人間界まで駆けおりたいという、詩の力強くかつ雄大な発想を高く評価したから。
- ② 違う形式の作品を提出したことは問題ではあるが、天柱の先端に身を置いて、太陽や月がこの世の中を逆方向に運行するのを見てみたいという、詩の奇抜で幻想的な着想を高く評価したから。
- ③ 本来求めていた形式とは異なる作品ではあったが、我が身を天柱の先端に置いて、太陽や月が人間界を巡ってゆくのを逆に上から眺めてみたいという、詩の気宇壮大な着想を高く評価したから。
- ④ 違う形式の作品をあえて提出した大胆さと、天柱の頂上に身を置いて、太陽や月が人間界を運行する様子を逆立ちしながら見てみたいという、詩の意表をつく型破りな発想を高く評価したから。
- ⑤ 要求されていた形式とは異なる作品を提出しても気にしない大らかな性格と、天柱の先端に身を置き、太陽や月が人間界を走るのを見上げたいという、詩の柔軟な発想を高く評価したから。